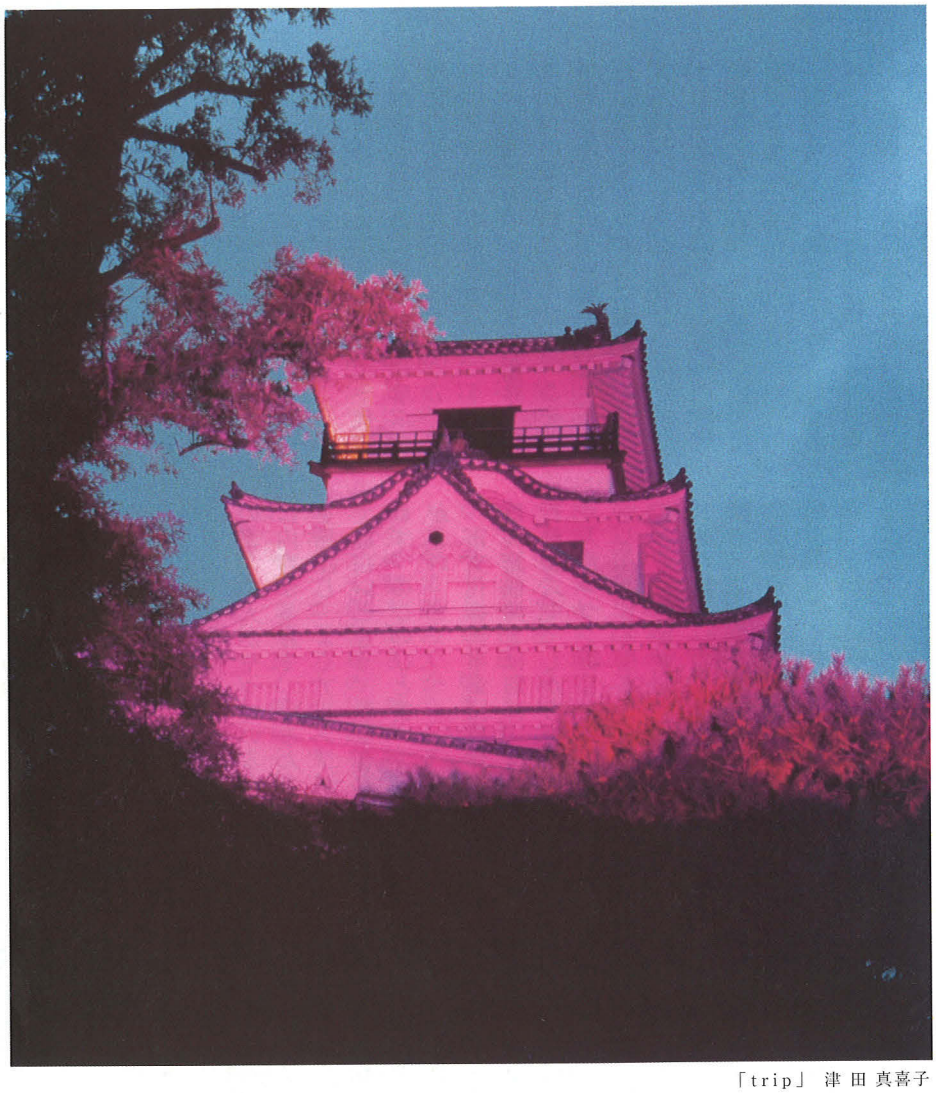
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

'99年5月 NO.89



「trip」 津田 真喜子

〈もくじ〉

のびのびと発想豊かに 文化振興事業団15周年 …… 橋井昭六 2
アナウンサー生活30年－その原点は高知に－ …… 久保晴生 3
第9回高知出版学術賞の審査を担当して …… 中内光昭 4～5
第15回高知市都市美デザイン賞講評 …… 吉田 晋 6～7
世紀末の宴“ポリクロスアート'99展” …… 藤崎幸雄 8～9
鏡村川口橋，高知，日本「外人の足で歩む」② …… マイケル・カーン 10～11
山はスキーに温泉・キノコ(3)～ユニークな湯に行く①～ …… 大森義彦 12
ニューヨーク通信①理事のみなさん，あなたが主役です！ …… 奥山 緑 13
風俗歳時記・風伯 …… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

のびのびと発想豊かに
文化振興事業団15周年

橋井昭六

この「文化高知」も八十九号になった。文化振興事業団発足とほぼ同時に刊行されたものである。

二カ月に一回の発行で、しかも薄い冊子なので、そう目立たないが、これで教えられたり、ためになったりすることが大変多い。出版物も厚ければいいというものではない。そんなに人というものは読んでいないのだ。薄くても必ず少しでも読んでもらうということがずっと大事である。

私はこのなかで、いくつか参考になったものがある。最近号に、上中下で三回連載された島田美喜子さん（主婦）という方の「満州（現中国東北部）苦難の一年」。飾り気のない文章だが、引揚者の帰国への痛切な道のりが記憶のままに、ありありとつづられている。飢え死にか凍死か、伝染病とも闘い、ソ連兵の襲来にもおびえながら、死線を越えての脱出行には胸を打たれた。

中村雄一さん（サニーマート代表取締役社長）の「アメリカに学ぶ食物文化と食事文化」は、年に二、三回はアメリカを視察するというこの人の小売業界、レストラン業界、先進状況の報告記だが、「『食』こそが世界各国の長い長い歴史から生まれた独特の文化の象徴である」という見方に基づくレポートで、腹を満たすことから心を満たすことへの時代の変化を教えられた。おいしい文化論である。

堀内豊さん（雑文家）の「おもかげ二人」。これは高知出身者の血を引く俳優志村喬にまつわる回想。われわれの年代にはなつかしい黒沢作品「生きる」などの余話を、しみじみと。

またこれも出ていたが、市民総合文化プラザの解説。平成十三年度中に高知市九反田に完成するプラザの概要。千頭輝雄さん（高知市文化体育施設建設室文化施設担当課長）の執筆。当文化振興事業団はゆくゆくはここの管理運営を引き受け、発展的に改組するであろうことになってきた。

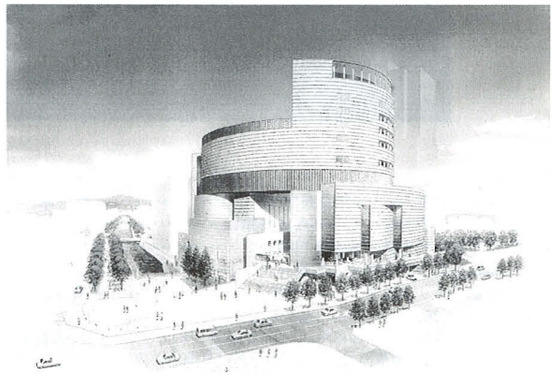
この「文化高知」は、編集を全くの素人の人がやっているが、私は実に内容が多彩で、いろんな方に原稿を発注し、よくアレンジができていて面白いと思う。執筆者も制約をされず、のびのびと書いているところがよい。

市文化振興事業団自体が、市の行政実務機関とは別に、自由な発想と行動様式で、しかも市民の知恵を取り入れつつ、新しい文化を提案していこうとして生まれた法人で、市民ミュージカル三本（「ミュージカルRYOMA」「ミュージカル津野山物語」「ミュージカル『絵金』」）を完成させたのをはじめ、出版学術賞、都市美デザイン賞、各種出版、文化講座などといういろんな試みをやってきた。

それが総合文化プラザというハコものを得て、構想を新たに、さらにジャンプアップしていければいいがと思っている。文化事業団は昭和五十九年五月三十日に発足して十五周年。よき節目へ来ている。見直しも必要だろうし。

東京ではハコものはたくさん出来すぎて、持て余しているのが実態。高知では、ハコが足りず、やりたい催しも出来ないという逆の状態だ。何とか市民の方々が満足できるような所へ、少しでも近づければ幸いである。

（はしいしょうろく・㈶高知市文化振興事業団理事長）



市民の文化・芸術活動、生涯学習の拠点施設として建設中の（仮称）市民総合文化プラザの完成予想図

アナウンサー生活三十年
―その原点は高知に―

久保晴生

「NNN今日のニュース」に出演中の久保晴生さん（昭和59年ごろ）

ペギー葉山さんの歌で大ヒットした「南国土佐を後にして」は高知県人が集まる夜の会合で今でもよく歌われているようだが、私自身この歌が大好きで、とくに一番の「南国土佐を後にして都へ出てから幾年ぞ…」のくだりで自分と重ね合わせて感慨にふけることが多い。とは言っても私は高知生まれではなく父の仕事の関係で中学から高校にかけておよそ四年ほど高知で生活したに過ぎないのだが、この高知時代が私の人生を左右するほど決定的な年月になろうとは当時は気付きもしなかったのである。

市内の城西中学校に高松から転校し、その後今は女子高になっている丸の内高校に進学、まずは好きだった音楽部に入りコーラスや器楽合奏を楽しんでいた。その中、生徒への伝達事項を先生方が一方的にスピーカーで流していた校内放送を生徒たちの手でもう少し面白くやってはどうかという声が上がり、NHKの放送劇団に入っていた女子生徒や東京生活の経験があって土佐弁との使い分けができた私などをアナウンサー役に放送部が誕生した。

コールサインは一人前にMBC（マルノウチブロードキャスティングクラブ）、放送内容は昼休み、放課後にレコードをかけながら曲の解説をするディスク・ジョッキー、学校からのお知らせ、生徒の呼び出しといった程度のものであった。

しかしここでのアマチュア・アナウンサー体験が私の職業選択に大きな影響を及ぼすことになる。自分の声で情報が大勢の人々に瞬時に伝わっていく実感、自分の喋りを人に聞いてもらう快感、これはまさにアナウンサーという職業の本質であった。

大学に進んでからもアナウンス研究会に籍を置き、発声練習、ニュース、六大学野球の実況などを体験しながらプロのアナウンサーを目指した。そして運良く開局七年目の日本テレビにアナウンサーとして採用され、プロ野球、ボクシングなどのスポーツ中継、芸能・情報番組等を担当したあと、報道番組をメインの仕事に選ぶ。成田空港闘争・日本赤軍事件のリポートなど事件・事故の中継を手がける中、「きょうの出来事」や「NNNニュース」のキャスターを務めることになった。昭和天皇御大葬の特別番組を最後に現役を退いたが、アナウンサー生活はおよそ三十年に及んだ。そしてその原点は四十五年前の丸の内高校放送部にあったのである。

ところで今や世を挙げて女子アナ・ブーム、新聞・週刊誌等の活字メディアに女子アナの記事が登場しない日はなく、おひざ元のテレビ局も歌や踊りといった隠し芸で女子アナの特別番組を作り視聴者の関心を引く。

私事で恐縮だが娘の純子がNHKのアナウンサーとしてはやや型破りであることから、あの紅白歌合戦の紅組司会者に抜擢されたのだが、この辺から当人に対するマスコミの取材攻勢は止まるところを知らず、オールドアナの私まで度々引っ張り出される始末である。

そういった記事の中には、まじめな企画もあるが大半は憶測・伝聞をもとにした根も葉もない噂話の類で、ターゲットにされる女子アナ諸君が気の毒でならない。一時的に華やかさだけで話題になるのではなくコツコツと地道に放送の仕事に打ち込んでいるアナウンサーがほとんどであることを理解していただきたいものである。

（くぼはるお・㈱日本テレビエンタープライズ専務取締役）

第九回高知出版学術賞の審査を担当して

中内光昭

「高知出版学術賞」は、その名の通り、高知で行われた、または高知に関する、学術の香り高い出版を顕彰する賞で、一九九〇年に、高知市文化振興事業団により設けられた。

本年の応募は十九点で、ほぼ例年通りの数で、研究分野のバランスも比較的よくとれていた。一回目の審査で一次候補作品八点を選んだ後、各作品を数名の審査委員が精読して二回目の審査に臨んだ。精読者の意見をもとに、いろいろの角度から検討した結果、全員一致で次の三点が受賞作品に選ばれた。以下は、受賞作品の簡単な紹介である。

山本幸憲著『図説　日本の変形菌』（東洋書林刊）

〝変人〟という言葉があるが、変形菌はまさに〝変菌〟である。菌と言っても細菌とは全く別の生物。キノコの仲間にされたこともあったが、今はむしろアメーバなどに近いとされている。一生の間に、ある時は単細胞的に、ある時は多細胞的に振舞い、また、ある時は植物的にと、まさに変幻自在の生活をしている。この類の分類の専門家は極めて少ない。

著者は、高知大学教育学部卒業後、定時制高校に勤務する傍ら、長年、国内各地はもとより、海外の山野からも多くの変形菌を採集し、正確に記録、記載し、その業績は国際的にも評価されている。

この度刊行された図鑑は、研究史、分類体系、各論（種の記載、解説）からなり、我が国の主要な変形菌が検索できるようになっている。種名の由来や変遷などについては、通常の図鑑の域を出て、いわゆるモノグラフとしての内容を備えていて、極めて完成度の高い図鑑と言える。〝図鑑〟という形をとってはいるが、学術的な価値が高く、長年の努力の結晶として評価された。

山本正美裁判関係記録・論文集刊行委員会編監『山本正美裁判記録・論文集 ― 真説「三十二年テーゼ」前後』（新泉社刊）

山本正美（一九〇六～九四）は、土佐中村で生まれ、皮革工などとして働くうちに社会の矛盾に気付き、二十六年に渡ソして大学に学ぶ。その後、日本共産党の「三二年テーゼ」策定に関与する。帰国後、党書記長になるが、すぐに逮捕され八年間を獄中で過ごす。戦後は一時、党役員になるが、路線の対立から除名され、在野の評論家、市民運動家として八十七年の生涯を過ごした。

本書は、本県出身で、日本の政治運動史の中でも特異な経験の持ち主でありながら、県民にほとんど知られていない山本正美の人物像を紹介すると共に、彼が生きた時代にまつわる生々しい事実を呈示する貴重な資料集である。

本書は、治安維持法違反容疑の裁判の予審調書（三十一回分）、獄中手記、山本正美主要論文（二十編）、解説の四部よりなり、主要論文以外はすべて新しいものである。

裁判記録からは、当時の社会の動きが、獄中手記（検事宛の上申書）からは正美の革命観や革命戦略が迫力を帯びて伝わってくる。正美は幸徳秋水についても造詣が深く、秋水の「帝国主義」（岩波文庫）での解題や、秋水に関する論説も収められており、土佐との関連も深い。内容は詳細かつ具体的で、ドキュメントとしての価値が高く評価された。

松田清著『洋学の書誌的研究』（臨川書店刊）

「洋学」とは和学、漢学に対して、主に江戸時代に、西洋から入ってきた学問で、いわゆる蘭学はその代表的なものである。「書誌的研究」とは、書物の由来、変遷、その他、個々の書籍に関するもろもろの背景を明らかにする学問である。

もともとフランス文学が専門の著者をこの道に導いたのは、県立追手前高校の書庫で眠っていた一冊の手書きの蘭和辞典（ドゥーフ・ハルマ）である。十五年前に、たまたま本書を見つけた著者は、調べを進めるうちに、この〝追手前本〟こそ、本辞典の初稿本三冊のうちの一冊であることを証明する。著者によれば、適塾などで使われた本辞書の筆写本は第三稿をもとにしたものである。

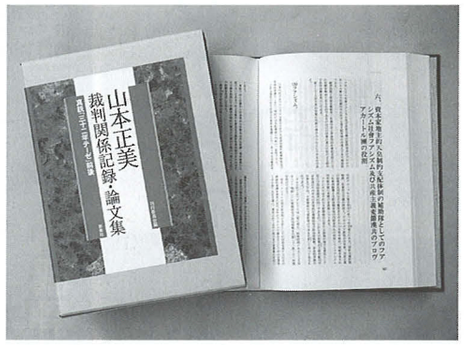
その他、平賀源内の「西洋職人図」、林子平の「海国兵談」など、多くの書籍について、実に綿密な調査、考証を重ねている。その手法は、綿密、徹底的で、実証主義の極致であり、洋学の流れに新しい光を当てたものとして高く評価された。

情報化の時代、ややもすれば、与えられた情報を加工して、研究したような気分になっている研究者が多い中で、「もの」や「こと」を大切にするこのような研究態度は貴重である。

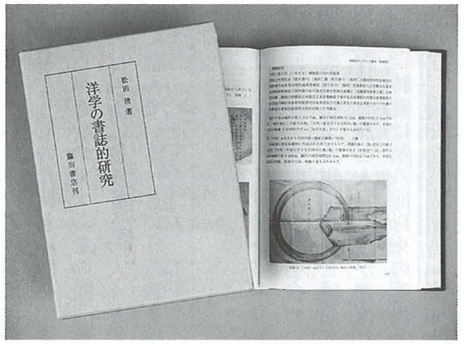
本年の審査に直接携わったのは、瀬戸勝男、西島芳子、吉竹博、内川清輔、田村安興の各氏に筆者を加えた六名である。

（なかうちみつあき・前高知大学長）

図説　日本の変形菌



山本正美裁判記録・論文集―真説「三十二年テーゼ」前後



洋学の書誌的研究

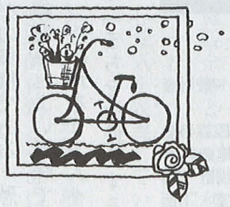
●広さ・内装　約96㎡・壁面布クロス張り
スポットライト完備

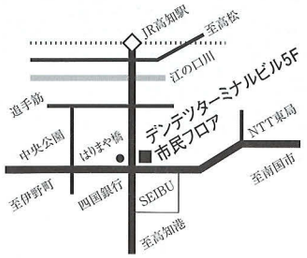
●使用料

展示	1日（9時～18時）	11,000円
	1週間	70,000円
会議	9時～12時	4,000円
	13時～17時	5,000円
	17時～21時	5,000円

※休館日　毎週水曜日（搬入・搬出日）
年末年始

市民フロア
個展・グループ展・会議に最適！





◆お問い合わせ
㈶高知市文化振興事業団
☎73－4365

第十五回高知市都市美デザイン賞講評

ダイアローグの都市

吉田　晋

都市居住者にとって美とは何でしょう？　美とは現実の日常生活とはある種の遊離したものと捉えられがちです。あるいは金持ちの道楽と。都市居住者にとっての美とは日常と何らかの関係があるものです。それは日常を再発見させるものであったり、日常を揺さぶるものであったりするはずです。それは都市に住む人々にとっての「リアル」そのものなのです。そういった「都市のなかのリアル」は、忽然と出現するものでも天から降ってくるものでもありません。都市に住んでいる人々から、さらに詳しく言えば集まって暮らしている人間同士の対話から生まれてくるのです。単なる対話ではなく、信頼関係と緊張関係を生み出す対話（ダイアローグ）からなのです。

発注者と設計者の関係についていえば、前者は「あなたの腕を信じて設計をおねがいします」、後者は「あなたのセンスを信じてよい設計をする」という緊張関係が根底にあってこそ成り立つものです。例えば発注者が建築や芸術に疎かったとして、「設計者に、全面的にお任せ」や「設計者を召使のように扱う」のでなく、一人の発注者として設計者と一対一の対話が必要とされているのです。自分なりの単語で良いと思います。両者の緊張関係が必要なのです。

何れにせよ、対話のなかでお互いの信頼関係も緊張関係も生まれてくるでしょう。対話なくしての端からの「お任せ」や「一方的な関係」は両者にとって、そして都市にとっても虚しい塊が生み出されるにすぎません。この公理に自覚的であるべきです。発注者は発注者の、設計者は設計者としての矜持と諦観を抱きつづけるべきなのです。その際、重要なのは「街に他の多くの人々と集まって棲んでいる」という意識を持つことでしょう。

高知市都市美デザイン賞も今回で十五回を迎えました。私を含めた各選考委員による現地調査と議論の結果、特賞一点と入賞二点が選ばれました。特賞は第八回以来の選出となります。高知を代表する「高知らしい」建物が完成したことを素直に喜びたいと思います。今回の受賞作品も、用途もサイズもさまざまですが、いずれも対話のなかの信頼関係や緊張関係が感じられるものであったことが特徴でしょう。以下、都市のなかの三つの対話をもって講評とします。

〈特賞〉はりまや橋商店街木造アーケード
発注者　はりまや橋商店街振興組合
設計者　はりまや橋商店街木造アーケード設計者グループ
㈲艸建築工房・平山昌信，㈲西森啓史建築研究所・西森啓史，元 尾崎邦彦建築研究所・尾崎邦彦，HF設計・樋口靖彦，㈱アルティ設備設計室・下飯野芳幸

ダイアローグ1
都市と対話する商店街

〈特賞〉はりまや橋商店街木造アーケード

日本初の木造アーケードは無数の対話の結果生み出されたものである。商店街、設計者、行政と多くの人々のダイアローグの集積である。恐らくそこには信頼関係とよい意味での緊張関係があったのだろう。人々が心をあわせて「まちを活性化する」ことの困難。それを乗り越えた無数の対話。林をイメージし、シンプルかつ力強い構造デザイン。街ゆく人の顔も楽しそう。このはりまや橋商店街は恐らく高知を代表するエリアとなるだろう。試みは現在（いま）も続けられている。南側のはりまや橋公園の整備とその景観、南北のエリアを繋ぐ路地的空間、個々の店舗デザインの共通コード。さらに広い視点で俯瞰すると、JR高知駅からはりまや橋商店街を経て九反田の（仮称）市民総合文化プラザまでの回遊的な都市空間。そういった「まちの活性化」をシンボライズするものとして木造アーケードが特賞に選出された。未来へとつながるダイアローグへの一歩として。

〈入賞〉はりまや［アルコ］
発注者　三郷開発㈱
設計者　㈱THINK建築設計事務所・前田　博

〈入賞〉山下脳神経外科
発注者　山下　茂
設計者　乃亜建築設計事務所・山本一夫

ダイアローグ2
環境と対話する商業空間

〈入賞〉はりまや［アルコ］

質の高い商業空間。多様なレベルに設定された床面が中庭を囲むかたちで配されている。屋根、壁、柱、とよく分節された基本的構造と隙間に設けられたガラス面の組み合わせは全体の開放性を高めている。その開放性は、南西コーナーの大きな樹木、施設の中心となる中庭、通り抜けできる路地、昔ながらの木造民家と土蔵へとつづくこの建物の外部空間構成を支えている。都市に属する外部空間と建築の内部空間がよい距離を保って存在している。昔問屋街であったこの地区に建設中のアネックスを含めて、既存の環境などこの街独自のストックを有効に活用しつつ、現代的かつオシャレな街が形成されることを期待したい。

ダイアローグ3
街行く人と対話する診療所

〈入賞〉山下脳神経外科

端正であり抑制がきいた立面はある意味ではクラシックといってよい明快なものである。発注者と設計者の考え方がポーチから中庭へと連続する空間によく表れている。駐車場は素気ない表情を見せているが、よく手入れされたアプローチと中庭は、カタイ施設に対して良い意味で先入観を裏切り、アットホームな柔らかい印象を与えている。都市の診療所として親密な空間。それは診療所のカオが見えるから。中庭は単なる借り物のお飾りに過ぎないガーデニングではなく、施設全体とよく調和したものである。それは十分に都市にある診療所の心意気を表現（あらわ）している。

対話を支えるのは、近隣、地区、都市といった空間的背景とそこに住む人々という人脈的背景です。そういった信頼関係や緊張関係を生み出す対話をあらゆる場所であらゆる時間で積み重ねた結果、総体として信頼関係と緊張関係に満ちた、エキサイティングでヴィヴィッドな都市を生み出すことができるのでしょう。それが都市のなかの「リアル」なのですから。

（よしだしん・高知工科大学助教授・建築家）

世紀末の宴
ポリクロスアート'99展

藤崎幸雄

去る三月十三日～三月二十二日、ポリクロスアート'99展が、高知城を舞台に開催された。本展を企画するにあたり、数年前から、私の中に去来しているものがあった。それは、〝なぜ芸術は必要なのか〟という問いである。

従来の〝観客が、作品と黙って対峙するという一方通行的〟な展覧会に対し、人は、得てして作品を前にして「いい」とか「悪い」とかはなかなか表現しないものである。そこには、意図してやってくる人たちだけが体験する空間が存在する。言わば、閉塞的な状態という趣がある。従来のスタイルを否定する訳ではないが、果たしてそれだけでいいのか。限られた展示室や画廊スペースの中、意志をもって観にやってくる人たちだけとの限られたつながり……。

アートを一つのジャンルとして、切り離して、日常を送っていることに疑問と危機感を感じていた。

ところで、高知県立美術館において、三月五日～七日、トヨタアートマネジメント講座〝アートはつかれる?〟というシンポジウムが開催され、パネリストとして出席した。この講座のテーマは、〝芸術と社会〟を互いに欠くことのできない存在として結び合わせ、そして、芸術と社会との橋渡しとしての〝アートマネジャー〟を育てる、というものであった。〝芸術は必要なのか〟という私自身の問いと共通するテーマでもあった。

では、なぜ、高知城をモチーフに選んだのか。誰もが知っている、高知の歴史的文化的象徴としての高知城。だが、もう人々の目には、日常そこにあるものとして映っている。それが、あってしかるべき「日常」とするならば、あり得ない空間に仕立ててみたいと思った。

ライトアップによる変化、それが視覚的に訴えるものは? そして周辺の山全体を使った野外作品展。さらに光の演出によって「非日常」と化した高知城の姿をバックに、雅楽、バンド演奏、音によるアートパフォーマンス。そこに生活し、行き交う人たちが、その空間を共有する。偶然目にした観光客、日々、公園の散策を日課にする人たち。

色とりどりに、浮かび上がらされる高知城。その違う角度からの、違う印象の高知城を見て、どう感じるだろう。綺麗だと思って見上げた人もいるだろう。中には、不気味に感じ、不快感を持った人もあるだろう。ただ驚いて何事かと見上げた人もあるだろう。どう見て、どう感じてもそれは構わない。それぞれの価値観を浮き彫りにすることは、ある意味必要なことであるのだから。

他方、この企画は、個人での発表では、限界を超えており、到底成し得ないものであった。高知城管理事務所、㈱四国舞台テレビ照明を「横軸」として、日常の中に、それぞれ関連性を持たない要素を配し、そこに、高知市文化振興事業団という、社会の構造的な「縦軸」が交差して成し得た企画でもあった。それぞれが、一つのシーンに共通項を持って作り上げたという内容は、今後、日常とアートとの関わりを考える中で、一つの切り口になり得たのではないか。

アートに必要性があるのかと問われれば、衣、食、住や娯楽の方が大きなウエイトを占めているようだ。だが、自分にとっては、分断された生活の中のそれぞれの要素に、つながりを持つような「横軸」、それが、アートの醍醐味のようなものではないかと感じている。

自分の日常の中で、あえて美術展など必要としないという人でも、今回「非日常的な高知城」を見て、それぞれが自分の価値観で、自分の意志で、「綺麗だ」「気持ち悪い」「見たくなかった」と声を発せられることは日常とアートの関わりをめざしたこの企画のねらいだったとも言える。

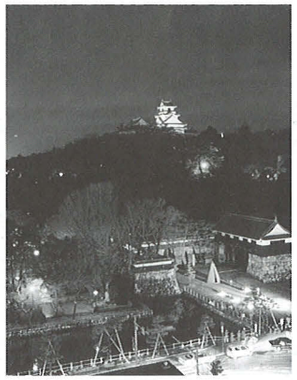
一〇〇%の総意と価値観の共有は、民主主義において、重要視される傾向にあるが、同時に、それは、没個性的要因や、非創造的な価値観の押しつけともなりうる。

アートとは、さまざまな価値観を持つものが、互いに共有し合い、瞬時に拒絶し合えることが、許されるものではないだろうか。

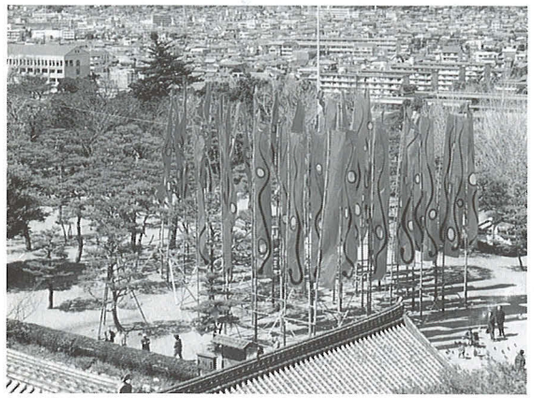
〝アートと社会との関わり〟を問うた、ポリクロスアート'99展は、世紀末のほろ酔い気分の宴だったのか、新世紀へのエピローグとなるのか。乾杯―!

最後に、高知城管理事務所のご理解と㈱四国舞台テレビ照明の全面的な協力、高知市文化振興事業団のご苦労と出品作家、関連企画への出演者の方々とともに、成し得たことに感謝いたします。

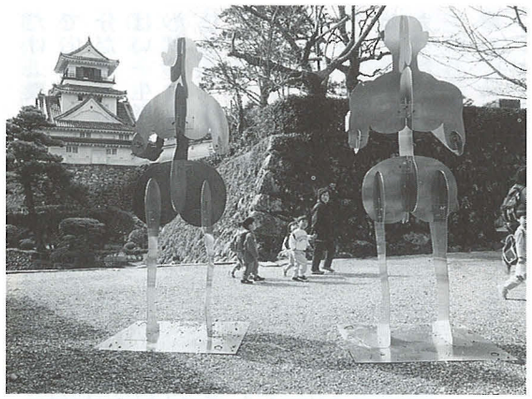
（ふじさきゆきお・美術家）

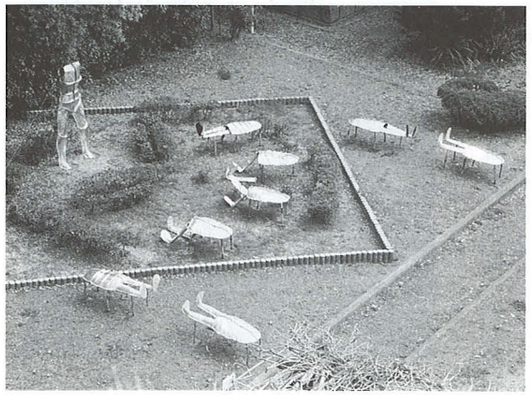


高知城のライトアップに合わせて雅楽の演奏などが催された



高知公園一帯が芸術空間に変身―追手門周辺や二の丸、辷山などに県内外32人の現代美術作家から35点の作品が展示された





“鏡村川口橋、高知、日本”

「外人」の足で歩む *Part 2*

by マイケル・カーン

県道6号高知伊予三島線、植田さんが高知に向かい、川を下っている。

一九九九年。鏡湖元旦マラソンから、鏡村の「マラソンシーズン」が始まる。役場の職員や農閑期に入った農家の青年たちは他の市町村との競争に向けて、夕方に走る練習をしている。僕も彼らみたいにもうちょっと意志が強かったら一緒に続けられたのにな。

一昨年、同僚である植田さんが僕に靴をプレゼントしてくれた。「一緒に走ろう」と。毎年、各市町村の職員が走る「足摺マラソン」に、誘ってくれたのは彼だった。靴は、白くて水色のラインが入っていて、とても軽かった。

僕は特に足が早いというわけでもない。それどころか、マラソンを走ったこともほとんどなかった。しかし、僕も一週間前からマラソン大会に向けて毎日練習したので、大会の本番では「まあ、まあ」の成績だったが、二十歳の「なんでもいける」自分と比べて体力の衰えを感じた。

そういえば、去年は準備運動なしに中学生とバスケットをやって足を捻挫してしまい、その年のマラソンには参加できなかった。

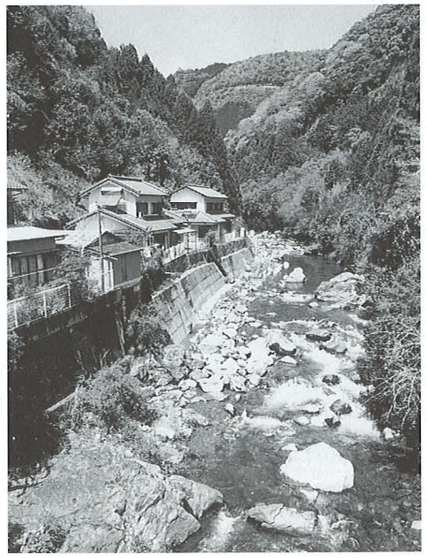
今年参加した別のマラソンでは、マイペースで走り続け、最後の部分だけ（職員が並んで応援している部分だけ）迫力いっぱい一生懸命走ったが、結局ばれてしまい、「あれマイケル、その最後のカーブを曲がったとこから、なんか急に早くなったね」と笑われてしまった。

そしてある日、走って帰る途中、ちょっとペースを落として歩いてみた。

景色が目に入ってくる……。山、川、静か。あ、川の音が聞こえる。改めて大きな自然の存在の中を歩いている自分を自覚した。

鏡村に初めて来たとき、村の生活の中に息づく「そのままの自然」に感動し、言葉がなかった。しかし、村長が僕にこう言った。「生まれてからずーっと住んでいる私たちは、その美しさに慣れて気がつかなくなってしまう」。

慣れる？　そのときは「慣れ」がどういう状態なのか想像できなかったが、たった三年で僕も時々この風景を忘れてしまっていたような気がする。



山、川、静か（鏡川の支流吉原川）

しかし、通勤の道を自分の足で歩き、周りをじっくり見回してみると、初めて来たころの気持ちを思い出すことができる。そして、もう一つの発見があった。ゴミがそこも、そこも、そしてそこも捨てられている。

「そのままの自然」をバックに不思議な光景だった。高知へ初めて来た僕や同級生の外国人たちは、日本での投げ捨てられているゴミの量にビックリした。長浜の海岸ではゴミ拾いイベントなどを開催したこともある。

当時の私たちが、この村の状態を知ったらどう思ったのだろう。砂浜もひどかったが、これはさらにひどい。鏡村を流れる鏡川は高知市の水源地になっている。私たちが毎日飲んでいる水がそこでできている、ということだ。

以前の取材で、生物学者の岡村収先生（高知大）と一緒に鏡川をまわったときにこう教えてもらった。いろんな国の川と比較しても日本の山が生む水は、もっとも不純物が少なく、どことも比べものにならないくらいきれいだと。そういった川の周辺に文化が発達してきたのだ。日本の文化が世界的に「どこにもない奥が深く、繊細な美しさの感覚」と認められているのは、日本の山の深さ、そして川の清さからかもしれない。

吉原川沿いの空き地に捨てられたゴミの山

鏡川は昔、「我が影を映すこと鏡の如し」と第五代藩主山内豊房侯が名付けたそうだ。

現在の消費社会の中、鏡川の上流に、人は、いらなくなった（処理がめんどくさい）ものをぽんぽんと捨てだした。ガードレールの向こう側の、気がつかないうちに増えているゴミを目にすると、無性に腹が立ってしまう。

川沿いには、「ゴミを捨てないで」というメッセージの看板がたくさん立てられている。皮肉にも看板の周りに、必ずと言っていいほどゴミが捨てられている。

毎年行われる鏡村の一斉清掃の日には、村に捨てに来る人への村民のいらだちの声が聞こえる。「自分たちのはいたものをまた飲みゆうみたいなもんやのにね」。

しかし、捨てているのは村以外の人とは限らない。村内の不法投棄状態を駐在さんと一緒に調査してみたら、ゴミの中から村内の人のものと思われるものが見つかった。以前、鏡中学校の生徒と一緒に中学校の周辺を歩いてゴミを拾っていた。僕の隣を歩いていた一人の生徒は、あるカンを拾い、さりげなく「あっ、これは僕が捨てたカンや」と言った。

鏡村広報のバックナンバーを見ると、一斉清掃でのゴミ拾いは何十年も前から続いているようだ。今の中学生は、生まれたときから山や道ばたに捨てられたゴミを見て育った。捨てても「まあ、いいか」と思うのは無理はないのかもしれない。

自分たちの飲み水を汚すかもしれないのに、人はなぜ水源地である鏡川にゴミを捨てるのだろう？

- 自分の飲み水はどこから来ているのか知らないから。
- 水には影響はないと思っているから。
- 少々汚しても「なんとかなるろう」と思っているから。
- 「それはいけない」と人に直接言われたことがないから。

今ではもう、一年に一回の清掃では済まなくなってきた。植田さんは県道6号線を今年走り出してから、道ばたに落ちているゴミの量がこれまで以上にひどいということに気がついた。特に最近では、車からそのまま道に落とされたであろうあやしい黒いゴミの袋を毎日のように見かける。

「鏡村の玄関がこんなんでは恥ずかしい」と、ある日彼が勤めている農林建設課の職員たちは、仕事が終わってからボランティアでゴミ拾いをし始めた。

鏡村の玄関か……。

毎日この玄関へ入ってくる、高知市から川を上っているランナーを見かける。彼らは、無表情で寡黙に走っている。鏡村のことをどう考えているのかな。高知市の人も、鏡村の人も、この鏡川にゴミを捨てている。ということは、捨てる人がどこの人かではなく、川はつながっているから、流域の問題として考えなければならない。そして、その流域に住む人同士で話し合う場がほしい。現在のコミュニケーションの方法は一方的な看板の上だけだ。

「ゴミを捨てないで」。

なぜ捨ててはいけないだとか、ちゃんとした捨て方とは何なのか、ゴミによって環境がどういった影響を受けるだとか、看板を見る相手に対し、愛情と根気を持って接していく精神がないと、分かってもらうのは難しいのかもしれない。

そして、ゴミ問題をきっかけに私たちみんなの意識を高め、何か積極的な方向へ持っていけるんじゃないかな……。「鏡」川には、そういう私たちの姿が写るのだから。

（鏡村役場総務課広報担当）

山はスキーに温泉・キノコ (3)

ユニークな湯に行く ①

ニセコ薬師温泉（北海道）

大森義彦

ニセコに数ある温泉の中でも、素朴さと言うか、飾り気のなさではここが一番ではないかと思う。つい最前まで冬は車が入らなかったそうだが、今では真冬でも玄関まで車で行ける。昔は成田温泉と称していたという。

二月にモイワスキー場近辺でテレマークスキーで深雪滑降を楽しむ集いがあり、四日間ほどは新雪と温泉三昧の贅沢な日々を過ごした。その仲間達と毎夜の温泉巡りの一つとしてここを訪れた。吹雪の暗闇の中をモイワスキー場から車で運ばれたので外界の様子は全く分からなかったが、相当の辺地のようだ。

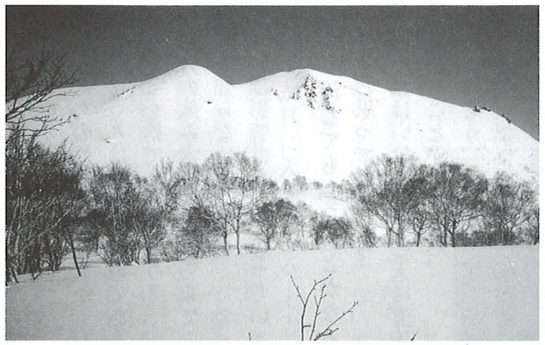
温泉棟の前に小屋があって、入浴券はそこの自動券売機で買う。うっかり隣のボタンを押すと、うどんの食券が出てきてしまう。何もかも一台で済ませてしまうところがおかしい。以前はお爺さんが券を売っていたというが、相当のお年寄りだったそうで、もしかしたら亡くなって券売機に代わったのかもしれない。

券売機はあるものの、ほとんど人の気配はなく、勝手に入っていけという雰囲気だ。温泉宿というよりは湯小屋といった風情である。

まず「にごり湯」に入る。文字通り赤茶色に濁っている。脱衣室から戸を開けるといきなり浴槽まで高さ一メートルほどの急な階段になっていて、油断していると足を踏み外して湯の中に落ちてしまう。

無事下に着いてからも、湯舟は腰以上の深さがあり、しかも底は岩がゴロゴロ、おまけに湯の中は見えないときているから、手探り足探りの慎重な態度が求められる。素朴といえば素朴、雑といえば雑だ。僕はこんな温泉が好きだ。

浴槽の真ん中で水面から上だけ仕切って、向こうは女湯になっている。その仕切りに頭をもたれて湯につかると、尻は当然あちら側にはみ出る。濁っていてはみ出た尻は見えないから、あちら側でも頭をもたれる人がいれば、尻と尻がくっついてしまう。そうなったら愉快だ。その時は女湯に誰もいなかったので、一行三、四名は仕切り板につかまって身を投げ出し、首から下だけ女湯につかった。



ニセコ連峰イワオヌプリ

にごり湯があるのなら、濁りのない湯があってもよいと考えるまでもなく、ちゃんと奥には「透明湯」があった。いちいち服を着るのも面倒なので、人気のないのを幸い腰にタオルを巻いただけで、透明湯へと廊下を走る。

こちらはなるほど透き通っている。湯舟はにごり湯より一回り小さく、三、四人でいっぱいになってしまう。奥は一段低く、湯舟からパイプで湯を落として打たせ湯にしつらえてある。ただ落差が小さいから、あまり効きそうにない。打たせ湯だけは男女共用だった。

しばらくこちらにつかって、打たせ湯などもやってみたが、あまり変わりばえのない普通の湯で、にごり湯の方が落ち着くということになって、再び腰タオルで廊下を走った。

湯上がりに薄暗い休憩所で薬草茶を飲んだ。しばらく寝っころがってまた後で湯に入りたいところだが、仲間がいるので後ろ髪を引かれる思いで引き揚げた。

ニセコは温泉の宝庫である。五色温泉、新見温泉、湯本温泉などひなびたものから、温泉街を構成する昆布温泉、近代的施設の整ったワイス高原温泉など、多様な趣を持った温泉が待ち受けている。五色温泉など、数年前まで冬季はスキーで入る手しかなかった。いずれも料金は比較的安く、山とスキーと温泉を楽しむには絶好の地だ。

（おおもりよしひこ・高知大学教育学部教授）

ニューヨーク通信 ①

理事のみなさん、あなたが主役です！

奥山 緑

昨年十二月に特定非営利活動促進法（NPO法）が施行された日本で、芸術団体の多くはまだ非営利法人格の取得に慎重な構えとか。先輩に当たるアメリカのNPO芸術団体について短く報告します。

私が現在学んでいる大学院では、とりわけこの「NPO」芸術機関をどのように有効に運営するかを徹底的に叩き込まれます。この背景には、非営利分野で働く総人口が総雇用者数の七・八%に達するという数字が表すように、この国では非営利分野の活力がアメリカの経済や社会の面で無視できない大きさになっている事情があります。

ISPAの理事のみなさん

さらに、「いい芸術を提供しているからうちの団体は安泰」と安心しているNPOはありません。二十年後に団体が生き残って社会に奉仕し続けるためには、マネジメントが何より大切という考えが背後にあるからです。ではNPO芸術団体の運営には何が必要でしょうか。

NPO芸術団体の経営主体は「事務局長」ではなくて「理事会」です。企業で言うと、意思決定をする取締役会に当たります。理事会は団体の使命に合致した長期および短期の活動方針を作り、その活動を地域に知らしめ、団体がその活動方針に則っているかに目を配ります。

活動資金を集め、時にはみずから寄付をすることもあります。これは金持ちしか理事になれないということではなく、理事みんながそれぞれ団体に貢献することが求められているという意味です。

大きな団体では、理事は財務、資金集め、任命、企画などの委員会に分かれて組織運営に関わります。団体の関わる公演や作品展に参加することも必須条件。自分の団体の提供する芸術やサービスを知らなくては広報マンとして失格だからです。

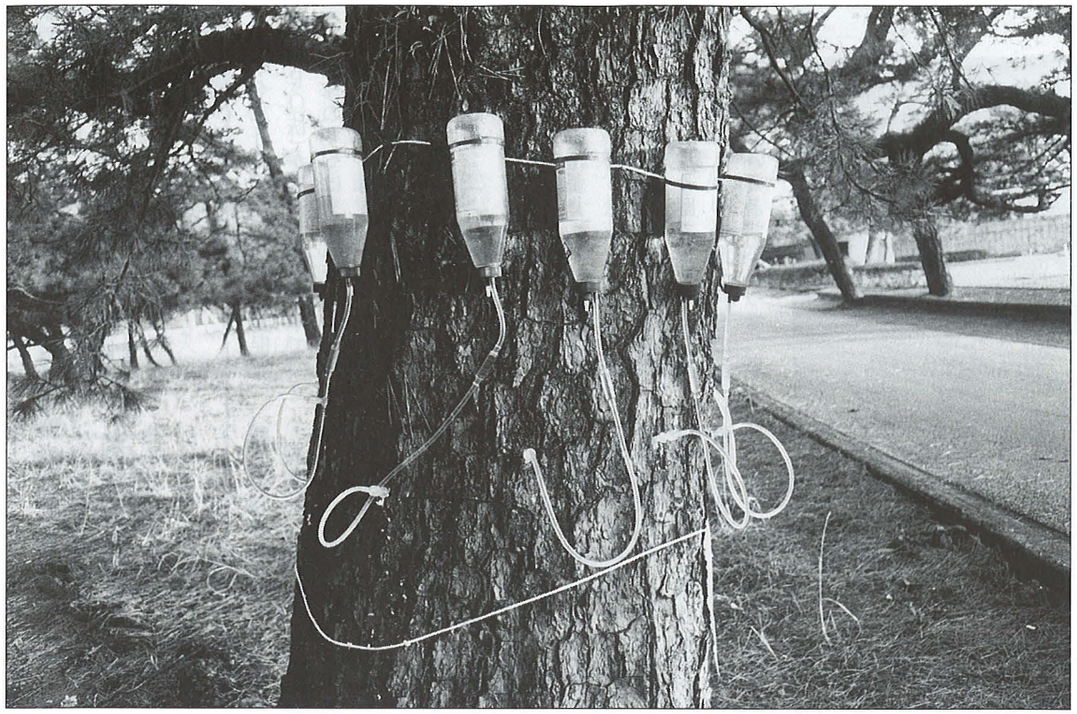
どういう人に理事になってもらうかによって、その団体の運命が左右されるといっても過言ではありません。保守的な文化団体の中には「理事は全員白髪のおじいさん」ということもたまにありますが、日本と比べると若い人がNPO芸術団体の理事を務めていることが多いです。

私の友人は三十代前半で自分が経営する音楽製作会社での仕事のかたわら、International Society for the Performing Arts Foundation（通称ISPA）という非営利団体の理事を務めています。つまり、NPOはバリバリの現役が自分の専門知識を社会に還元しうるシステムでもあるわけです。

NPO芸術団体と商業芸術団体の基本的な違いは、公益に奉仕したいのか、芸術で利益を得ようとするかの「目標」の違いであり、実際の活動は外からはまったく同じに見えることもしばしばだということを付け加えておきます。例えば、NYの非営利劇団で最近もっとも成功しているといわれる四万人の顧客会員を持つラウンダバウト・シアター（ブロードウェーで上演中のミュージカル『キャバレー』の製作主体）は、連邦税免除の非営利法人格を持っています。劇団の使命に合致した良質の演劇を社会に提供する活動である以上、この『キャバレー』は免税枠の活動のうちに入る立派な非営利活動に当たるわけです。アメリカのNPO団体が自分たちの収益事業を成功させて強固な経営基盤を目指す方向に進んでいる好例です。NPOの経営は一般企業と非常に近いものになっているようです。

最後に、創設時は確かに理想に燃えたNPOだったのに、いつからか、創設者や事務局長、特定の理事の私物になってしまうこと、アメリカでも多々あります。「このNPOは誰のもの？」と理事会がみずから定期的に問いかけるシステムをあらかじめ規約に織り込んで、権限委譲に備えておくことでこうした事態は回避できるはずです。理事のみなさん、あなたが主役です！

（おくやまみどり・舞台制作者・セゾン文化財団国際奨学生としてコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ芸術経営学科に留学中）



高知を撮る　**生きる**（平成6年 種崎）吉村謙一郎

第15回写真コンテスト入賞作品

千松公園で偶然見かけた異様な光景に思わずシャッターを切った。松枯れ対策のための「点滴処理」だという。延命対策ではあるが、イタイタしい姿であった。

ユーロの陰（かげ）に

風俗歳時記

1987（昭和62）年、「ミツコ・二つの世紀末」という、吉永小百合主演のテレビドラマが、全五回にわたって、NHKで放映された。

「ミツコ」こと青山光子は、1874（明治7）年生まれ、18歳で駐日オーストリア代理公使ハインリッヒ・クーデンホーフ＝カレルギー伯爵と結婚、四年後に渡欧、さまざまの苦難に耐えて、ウィーン社交界の花形となった女性。

上記のドラマは、百余年前に、ヨーロッパへの民間大使の役目を果たした、国際人ミツコの波乱に富んだ生涯を描いた作品である。

ところで、今なぜミツコなのか？

実は、ミツコの次男、東京生まれのリヒャルト（日本名・栄二郎）こそ、今日EU（欧州連合）として実を結んだ、欧州統一運動の先駆者であった。

リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー伯は、第一次大戦の結果に鑑（かんが）みて、ヨーロッパの復興と再生を果たすためには、欧州のすべての国が合体して、一つの国になるべきだと痛感。『一つの提言―汎欧州』と題する論文を発表、パン・ヨーロッパ連盟を設立、雑誌『パン・ヨーロッパ』を創刊した。

紙幅の都合で、その後の経過の詳細は省略するが、1958（昭和33）年には、EEC（欧州経済共同体）が発足して、ミツコは「EECの母」と呼ばれた。

また、リヒャルトの提言から四分の三世紀を経た、本年一月一日には、遂に欧州単一通貨・ユーロが誕生、当面は銀行や企業経理上の〈帳簿通貨〉として使われることになった。

いまや、世界経済はドル対ユーロ二極体制の新時代を迎えたのである。

最後に、ドラマ「ミツコ」に関する資料を博捜してくださった、映像芸術研究家・坂本昌隆氏（高知市文化振興懇話会委員）と、『ユーロ生誕』の著者・山本武信氏に深甚なる謝意を申しあげる。

（朴）

大川筋の武家屋敷（旧手嶋家住宅）の復原工事が終わり、4月1日から一般公開されている。白壁に続いて左右に武者窓を備えた長屋門が一際目を引く。内部には三畳の部屋が4つあり、この屋敷の使用人が暮らしていたという。水路も再現され、夜はライトアップで彩りを添えている。主屋も時代考証に合わせて復原され、自分の目で見て、手で触って昔の暮らしに思いをはせることができる。市民の長年の保存運動に敬意を表したい。

風伯

風になって

毎年のように連休の前後、一度は国道の長距離ドライブに出かける。この時期に多いツーリングのバイク族達を見たいからだ。ソロやグループの若いライダー達（最近は女性も増えてきた）と一緒に流れて行く一時が楽しい。

彼等が互いに同種族だとどこで判るのか、ヘルメットで顔も見えない者同士、すれ違いざまに親指を立てて片手を軽く胸の前に突き出すあの連帯の挨拶は一体いつ頃から始まった習慣なのだろうか。

グループで軽量級のバイクや経験不足の仲間を中に包んでリーダーが先導する走りは、まるで渡り鳥の飛行を見るようだ。一方でソロの若者が一人、道端の樹蔭にブーツの足を投げ出して、パンと牛乳を両手にした食事風景も気持ちが良い。バイク文化とでもいう世界が着実に育っているようだ。

警察や教育関係者が集まった数年前のある会合で、バイク少年の非行が話題となったが、そこで「バイクは彼等にとって自己主張の一つなんです」と言った当時の高知少年鑑別所のO所長、私は青少年問題がテーマの講師にぜひとお願いをして、後日の研修会でとても素晴らしい話をしていただいた。

定年を間近に控えていたその時期でもなお重量級バイクを駆ってご自身ツーリングを楽しまれていたOさんは、退官後は故郷の九州に帰られたとか。きっと今頃は初夏の風にのって、いや自身が風となって阿蘇の高原あたりを駆け抜けているのではないだろうか。

（南北）

土佐弁 土佐日記

土居重俊 監修
高知市文化振興事業団 編

B6判・上製本・130頁
本体価格 971円（第2刷）

紀貫之の名著『土佐日記』を、現代とさことばでつづる。古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。

珍聞土佐物語（上・下巻）

――五十人の語り部たち

依光　裕 編著

四六判
㊤392頁　㊦408頁
本体価格 各巻1,553円

土佐の山や海辺の村の囲炉裏端で古老が語った地元の伝説や小咄の数々。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。

幕末の青春

――坂本龍馬の生涯

山本　大 著

四六判・168頁
本体価格 1,165円

激動の幕末期を駆け抜けた坂本龍馬の一生を、史実に基づき分かりやすく描いた、子どもから大人まで親しめる屈指の龍馬伝。

今号の表紙

「trip」　津田真喜子

ポリクロスアート展に誘われて、この夜は、かつて遭ったことのない高知城の下を歩くことになった。

春の夜雨が、あの時代の、まだ活きていたころの高知城をよみがえらせたかのように思わせた。

3日間の毎夜、私は、時代を超えたような空間をさ迷った。

（つだまきこ・スタジオｅｎ）

文化高知 No.89 [隔月発行]
1999年(平成11年)5月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-0870 高知市本町五丁目2番3号
TEL&FAX(0888)73-4365/郵便振替01680-5-114869
E-mail bunshin@mail.i-kochi.or.jp

(財)高知市文化振興事業団創立15周年記念事業

イッセー尾形の都市生活カタログ

「カラス」写真撮影/検見崎誠

《プロフィール》
イッセー尾形：1952年福岡県生まれ。81年日本テレビ「お笑いスター誕生」で金賞受賞。以後，「都市生活カタログ」など一人芝居をシリーズ展開。93年のニューヨーク公演を皮切りに海外公演も多数。テレビドラマ，CM，エッセー，小説などでその多才ぶりを発揮している。

自作自演の一人芝居で、日本はもとより海外でもその実力を高く評価されているイッセー尾形さんを招き、独特の“イッセー・ワールド”を高知で初めて披露していただきます。

◆日　時　平成11年7月13日(火)，7月14日(水)午後7時から
　　(開場午後6時半)
◆会　場　高知県立美術館ホール
◆入場料　4,000円（全席指定）
　＊「文化高知」賛助会員の方は10%引き。ただし，高知市文化振興事業団でお買い求めの場合に限ります。
◆ﾁｹｯﾄ発売日　6月12日(土)
◆発売場所　高新プレイガイド・県民文化ホール
　　県立美術館ミュージアムショップ
　　高知市文化振興事業団

◎賛助会員の方は，一般発売前にチケットが予約できます。
（1人2枚まで）／応募多数の場合は抽選
・締め切りは5月31日(月)必着
・申し込み方法は，文化振興事業団(☎73-4365)までお問い合わせください。

◎チケット郵送サービスをご利用ください。
・受付期間　6月15日(火)～6月30日(水)
・詳しくは，文化振興事業団までお問い合わせください。

主催：高知市文化振興事業団・高知新聞社・ＲＫＣ高知放送
企画・制作：森田オフィス

好評発売中

土佐の習俗
婚姻と子育て
坂本正夫 著

四六判・並製本・200頁
本体価格　1,400円

民俗学の宝庫といわれる土佐の村々を歩き、土地の古老たちから伝承を採集。35年にわたる調査研究の中から婚姻と子育てに関する伝承・習俗を体系的にまとめた書。

やっさんの
わくわく動物記
中西安男 著

Ａ５判・192頁
本体価格　1,800円

野生動物の生態や習性・個性がいきいきと描かれ、読み物としておもしろいだけでなく、手軽な動物ガイドブックとしても最適。